

私を本 女を磨くの時間

2

奇数月発行
650円



儉約は美德

逆境の今こそ

夢を叶える

幸せの国
ブイタン

紀行

インタビュー

筒井真理子

女優・筒井真理子



撮影：笠原修一
スタイリスト：岡部久仁子
ヘアメイク：長網志津子



愛は惜しみなく注ぐこと――

「ケチはダメだよ。とくに、愛情のケチは人生を暗くするからダメだよ」
母が教えてくれた言葉です

女優・筒井真理子



筒井真理子(ついまりこ)

早稲田大学在学中に鴻上尚史主宰「第三舞台」に所属。その後、舞台をはじめ映画・テレビ・CMと幅広く活躍。1994年映画「男ともだち」(山口巧監督/東京国際映画祭・参加作品)で主演デビューを果たす。主な映画出演作品に「クワイエットルームにようこそ」(松尾スズキ監督)、「アキレスと亀」(北野武監督)、「ヒーローショー」(井筒和幸監督)他多数。2011年11月～2012年1月の第三舞台封印解除&解散公演「深呼吸する惑星」に出演中。

大学在学中から鴻上尚史主催の「第三舞台」に所属して女優として活躍し、以来、舞台のみならず、映画、テレビなど映像の世界でもさまざまな役を演じ続けている筒井真理子さん。役柄によっては別人に見えてしまう演技力は、『徹子の部屋』で黒柳徹子さんに「カメレオン女優」と評されたほど。演技派なのに嫌味がなく、サラリと自然体で役柄に入ってしまう。

「第三舞台」で鍛えられました

とにかくどんな役を演じるのも面白いんです。役になりきるのが好きで、ひと役ごとに髪型を変えたりするものだから、かつての事務所には、「それじゃ、ずっと名前を覚えてもらえないよ」つて言われました。ひとつだけ心がけていることがあるんです。いただいた役は誰よりも愛そうと。自然にそうなっちゃうんですけどね。

もともと女優を目指していたの

ではないんです。早稲田大学に入つて、たまたまそこで第三舞台の旗揚げ公演を観て「あ、こんなお芝居もあるんだ。ポップで自分にもできそう」と思ったんです。第三舞台に入るために早稲田に入ったわけではないんですよ。

大学時代、お付き合いしていた人が落ち込んでしまうという出来事がありました。放っておけないので、病院に連れて行ったり、なんでもこんな若いのに苦労してるんだろ、と思うくらいお世話して忙し

くしていたんです。

やっと、その人がアルバイトできるくらいに立ち直ったちようどその時に、大学の大隈講堂の前に、第三舞台の汚いテントが立っていたんです。「よし、今、ここに入つてしまおう！」いきなり、「すみません」と入つていつてしまったんです。私が、上演中の神聖な楽屋にひよっこり入つていったものだから、羽交い絞めにされました(笑)。私、舞台のこと、何も知らなかったんですよ。



入ってからは、上下関係は厳しいし、ものすごく体育会系だし、ほんとうに大変でした。第三舞台は当時、早稲田の演劇研究会の中にあつたんですけど、演劇研究会自体が厳しいんです。それはもう、世の中の理不尽を知ったという感じですよ。

「身体訓練」というものがありました。体を壊すようなうざぎ跳び100回とか、腹筋100回など、女子も男子と同じ舞台上に立つんだからと、男子とまったく同じメニューをこなすんですよ。スポーツ科学の発展している今ではありえないと思うんですけど。おかげで女子もみんな筋肉がすごいことになってました。女優といつても、第三舞台ではチャホヤなんてされないんです。ボロ雑巾と言われて

ましたからね。寛ちゃん（寛利夫さん）は、「演劇虎の穴」と言っていました（「虎の穴」とは漫画タイガーマスクに出てくる極限の訓練を行うレスラー養成機関のこと）。

天職と言われて

鴻上尚史さんは本当に怖かったです。強い父親のような感じでした。ダメ出しする時に、おまえの人格が悪いと怒られたり（笑）。

私自身ポヤンとしてる存在だったのもあつて、稽古中はほんとによく怒られましたねえ。もうだめだ、これ以上できなかつたら迷惑かける、もうこれで終わりにしてやめよう、と思っていると、力が抜けるのか、ふっとできたりするんですよ。そんな現場の中でがん

ばっていました。

ある時「もうダメ、私は役者という仕事に向いていない」と思いつめたことがあります。それで、たまたま友人に勧められてとてもよく当たると言われていた京都の古い師さんに試しに電話したんです（笑）。「1時間後電話をください」と言われました。

電話するまでの1時間、ほんとうにいろいろ考えました。もし占いの師の人に「向いてない」と言われたら、どうしようって。あらためて考えてみたら、そんなこと言われても、他に何をしていたかわからない、私は芝居の他には何もできないと思ったんです。ですからもう答えは言わないでもらおう、と思つて電話したら、開口一番「天

職です」と言われました（笑）。それからは、もうふつきれましたね。

「第三舞台」は大変でした。でもそうした厳しいところにいたら、その分、テレビなどの映像に出るからは第三舞台以上の厳しさは感じませんでした。今思えば、私の場合は、第三舞台に入つて、初めてお芝居というものを知つた

ので、それがすべてだと思つていたところがあつたんでしょうね。その後、外の仕事をしてから、「ああ、あれは鴻上さんのメソッド（方法）だったんだな」とわかりました。今思うと、自分に合わないと思うなかで、頑張つて一生懸命やってたと思います。でも、だからこそ、私自身はそこにいた価値があつたし、得るものがあつたと思います。

今、第三舞台の最後の舞台をやっています。鴻上さんの台本があがるのもギリギリだったのですが、台本もらつて4日目には、誰も台本を持たずに立ち稽古してました。異常な早さですよ。皆、鍛えられた人たちですからね。この舞台で解散するのは寂しいですね。

心理学の勉強に夢中です！

向いてないんじゃないか、と考えることはあつても、何か別のことをしたい、と考えたことはありません。結婚願望もあまりなかったです、不思議なことに。でも、カウンセラーはやってみたいと思つたことがあります。じつは今、時間がある時には心理学の勉強をしていますよ。

「深呼吸する惑星」大千秋楽 ライブビューイング

ワーナー・マイカル・シネマズ24劇場含む
全国30劇場

作・演出：鴻上尚史

出演：筧利夫、長野里美、小須田康人、山下裕子、
筒井真理子、高橋一生、大高洋夫

本作品は10年の封印期間を経た「第三舞台」の“復活公演”であると同時に、“解散公演”になることを鴻上さん自身が発表し、大変な話題を集めました。スピード感あふれるセリフ回しと場面転換、社会への鋭い風刺とそれを包み込むギャグの応酬、シリアスと笑いの境界を自由奔放に行き来する、唯一無二のエンターテインメント。「多くの人の思いが詰まったラスト公演を、1人でも多くの方にご覧いただきたい」という劇団の意向により、最終日の公演を全国の映画館で生中継いたします。

1月15日(日) 18:00 上映開始

※一部劇場では13:00上映回があります。



【鑑賞料金】3,300円(本公演を実施した地域)
2,800円(本公演を実施していない地域)

チケットぴあにて 発売中

【配給】ワーナー・マイカル 【協力】WOWOW

公式サイト

<http://www.daisanbutai-live.info>

のケチは人生を暗くするからダメだよ」って。ほんとうにそうだな、と思いますね。その言葉の通り、私たちきょうだいに、母は惜しみなく愛情を注いでくれました。実家の裏庭に通り道があるんですが、

そこを通る近所の子たちにもみかんをあげたりして、よその子もかわいがってましたね。ものすごくおらかな人だったんですよ。そんなふうに、母からは素敵な言葉をいっぱいもらいましたね。そ

うそう、「結婚しないの？ 1+1は2じゃなくて、2以上ののよ」とも言われていました。それについては、残念なことになってますけどねえ。これから探せるかしら？

(インタビュー/戸塚美奈)

心理学って、面白いですよ。お芝居にとっても似てるような気がするんです。今、さまざまな心因性の症状が問題になっていきますよね。症状としての出方はいろいろですが、心理学で考えると根のところが、問題は同じだったりするんです。自分という存在を認められなかったり、愛されなかったりすること、で起こっていることが多いらしいんです。同じようにお芝居というものも、まず最初に役の人間を深く理解することが基本なんです。だから、似てる気がするんですよ。心理学の中で、演技を使うことでもあるんです。ロールプレイというんですが、自分を傷つけた人を演じさせて、精神のバランスをとらせたりする手法があるんですよ。

そんなふうに、演技って、もと

もとそういうカウンセリング効果があるものなんです。観る方にも演じる方にも癒す効果があるんです。心理学を勉強していると、自分の不自由さってこういうことだったんだ、とわかって、自分もラクになっていくし、芝居にも生かせるし、悩んでいる人の役にも立てることがいっぱいある。ですから勉強を続けていきたいと思つてます。

両親が惜しみなく愛情を注いでくれました

私、あまり苦勞してなさそうに見えるみたいなんです。ちよつと笑っただけで、すごく楽しそうに見えるらしいんです。

私には、子どもの頃に両親にた

くさん愛情をもらったので、その愛情がいつまでもつてるんじゃないかと思うんです。父はリベラルな考え方の人で、たし、母も本当に愛情深い人でした。その分、芝居を観てくれるお客さんに少しでも恩返ししようかと思つてます。

私の母は、面白いんですよ。私は面長でしょう。私の顔を見ていつも「面長が一番！」と言つてくれてたんです。ところが、姪っ子が丸顔なんです。そしたら、「丸顔が一番！」って言ってる(笑)。

そういう人でしたから、きょうだい4人いるんですけど、誰ひとり、母の愛情に不服を感じていないんですよ。

母は「ケチはダメだよ」ってよく言っていました。「とくに、愛情